
仮面ライダーディケイド～仮面ライダーオーズの世界～

剣崎シンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜仮面ライダーオーズの世界〜

【Nコード】

N6186X

【作者名】

剣崎シンジ

【あらすじ】

仮面ライダーディケイド…門矢士は様々な世界を旅していた。

そして今度の世界はオーズの世界！

だがその世界では探偵の士、派手なおじさん、そして人を襲うオーズ！？

仮面ライダーディケイド…その瞳は何を見る？

第一章（前書き）

はじめまして剣崎シンジです！

これが初作品なので暖かく見守ってもらえるとありがたいです。

第一章

新しい世界と金持ちと人探し

「ここが新しい世界か」

俺の名前は門矢士。訳あって様々な世界を旅しているのだが、今度は高いビルが建っている街に来ていたのだ。

「今度はどんな世界なんでしょう?」

「ていうか士、その格好…」

先から順に光夏海、またの名をなつみかん。

それと小野寺ユウスケ。仮面ライダークウガがなんか言っていた。分かってるよ…分かってんだよそんなこと…!

「探偵…だよな」

「お前もな」

「えっ!?!」

気づいていなかったのかよ…。

ユウスケのアホさには脱帽するぜ。

「探偵ですか。この世界での士君の役目は何なんでしょうね」

「知るか。適当に行動してれば勝手に何か起こるだろ」

「探偵何て何するかわかんないよオレ!?!」

とりあえずすることもなくブラブラ歩いていると、

「もしもしちょっといいかね」

「？」

誰だ？

後ろを振り向くとそこには赤い派手な服を着た初老の男が立っていた。

「何か用か？」

「君たちは探偵か何かかい？依頼をしたいのだが」

「…」

いきなりだな…。

とりあえず話を聞いて判断するか。

「わかった。話を聞こう」

「人を探してほしい」

「人探し？」

ユウスケが聞き返す。

「あー…人ではあるのだから…説明しづらいな。写真を見せてくれ」

そういつて男は写真を取り出す。
そこには…

「「えっ!？」」

「こいつは…」

「私は仮面ライダーオーズと呼んでいるよ」

そこには赤い鳥を連想させるマスクをした仮面ライダーが写っていた。
た。

これで大体分かった…

「そうか…ここはオーズの世界か」

「喫茶店AGITΩ」

「オーズを探してほしい理由を聞かせてもらっていいか」

俺たちは場所を変えて喫茶店で話をしていた。
立ち話なんかゴメンだぜ。おばちゃんじゃあるまいし。

「それは話せない。だがその分報酬ははずむ」

「口止め料か…いくらだ」

「2000万」

「「「2000万!?!？」」」

「それとセルメダル2000枚も…って聞いてないね君達」

驚愕。

レベルが違いすぎる。

ここは断るのが懸命だろう。

「断…」

「やります!!」

「バツ…おい!!」

なつみかあああん!!何やってんだお前ツ!!

(これで土君に踏み倒されかけている分を取り返して…それどころかリフォームできます!!)

「夏海ちゃん…?途中から声がもれてるよ…」

おい原作のヒロイン!それでいいのか!

「でもまあ土。受けるのにはオレも賛成だな」

ユウスケまで…!。

このままでは押しきられる…!

「いやだめだ!!2000万なんて怪しすぎるだろ!!よく考えろ!!」

「人の言うことを疑うのはダメですよ!」

「そうだそうだ!」

この能天気共め…!

「もういい!勝手にしろ!!」

「それでは契約成立だね。私の名は斑鳩鴻星だ」

そういつて斑鳩は去っていった。

この時のことがあんなことに繋がるとは俺たちは思ってもみなかったんだ…。

第一章（後書き）

文才が無さすぎる！

そう思った方も思っていない方もこんにちは。

剣崎シンジです。

初作品を読んでもらってありがとうございます。

この小説は一応土目線から進んでいきますので悪しからず。

オリキャラについてですが、

いかるがこうせい
斑鳩 鴻星

鴻上光生のリイマジです。

ひとの話を聞かない派手なオヤジですが、人のことは考えています。

次回はオース登場予定です！

第二章（前書き）

士「二章キターッ!!」

ユウスケ「俺たちがあらすじを担当するみたいだ」

夏海「私…今回空気なんですけど…」

士「なに言ってるんだ。お前は空気なんかじゃない、みかんだ」

夏海「士君!」

ユウスケ「あらすじ…やろうぜ」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事!!」」「」

士「1つ!新しい世界に到着!」

ユウスケ「2つ!俺たちの格好…やっぱ探偵?」

夏海「3つ!斑鳩さんという人に依頼を受けました!オーズを探しましょう!」

第二章

バイクと000とタトバキック

俺たちは早速喫茶店を出てオーズを探して聞き込みをしていた……のだが…、

「オーズ？なんだそりゃ」

「この写真のヤミーのこと？」

「見たことはあるけどねー…すぐにどっか行っちゃって」

てのがほとんどなのだ。

ていうかヤミーってなんだ。

1時間も聞き込みをしてこれじゃあ埒があかない。
切り上げるか。

「おい、お前らそろそろ…」

「や、ヤミーだあああ！…！」

叫び声？どこからだ？

「ヤミー？」

「さっきもそんなことを言っているヤツがいたな」
「と、とにかく行ってみましようー！」

叫び声が聞こえた場所にはカマキリのような怪人、カマキリヤミーとバイクに乗った黒い服の兵士がいた…100人くらい。

「多ッ！！なんだこのバイク集団！？」

なんかカブトの世界のゼクトルーパーを思い出すな…。

「なんかカブトの世界の兵隊に似てますね…」

うん。もういいからな。

なつみかんが俺の心をリピートしたその時、

「あれはライドベンドー隊です」

後ろから声！なんだ！？全くけはいをかんじなかったぞ！？

「…誰だ」

「失礼しました。私は外街エリ。斑鳩ファウンデーション会長秘書です」

「い、斑鳩ファウンデーション？」

この世界には来たばかりだからしょうがないが、ユウスケが全く聞いたことのない名前に困惑していた。

簡単にうるたえるなよ…クウガだろ…

「あのライドベンドー隊はヤミーの被害を最小限に押さえるため派遣されました」

ってことはヤツらは使いつ走りか。

よく見ると赤い鳥やら青いタコやらが飛んでヤミーを攪乱している。

その間にバズーカみたいな武器で攻撃…よくできたコンビネーションだな。
だが…

「これじゃ倒すのは無理だな」

「え？何でだ土。あのヤミーってヤツ手も足も出てないじゃんか」

「どの攻撃も決定打に欠ける。この戦い方じゃ時間稼ぎにしかないぞ」

「それでいいのです」

「それでいい？」

「どういうことだ？」

「倒す気がないのか？」

「彼らは『ヤツ』が来るまでの時間を稼いでいるのです」

「『ヤツ』？」

「オーズです」

「『！？』」

「オーズだ！？それならあの戦い方にも納得できるが…」

「じゃあなぜ斑鳩は俺たちにオーズ探しを頼んだんだ？」

「オーズはヤミーと戦うために出てくる。それならわざわざ探す必要なんてない。」

「いや…それが最近…」

「？」

「急に口ごもり始めたぞ？」

訳有りか？

「一体どうしたん…」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ♪タ・ト・バ♪タ・ト・バ♪』

この音声は…来たな。

「オーズだ！」

ライドベンダー隊の誰かが叫んだ。
だが…様子がおかしい。

「はあっ！」

「ぐわああああ！！！」

ツー！なんだ！？

オーズが手近なライドベンダー隊の2人を襲い始めたぞ！
これは…

「様子がおかしい！いくぞユウスケ！」

「え？あ、わかった！」

「変身！！！」

『K a m e n R i d e D A C E D E ！』

俺はマゼンダのボディにバーコードのようなマスクをした仮面ライダー・デイクライドに、ユウスケは赤いクワガタのような仮面ライダー・クウガに変身した！

「いくぞ！！俺はオーズをやる！ユウスケはヤミーを頼む！」

「ああ！」

まず俺はオーズに特攻！
そして…

「くらえ！！」

『Attack Ride Slash！』
「ぬうッ！」

剣の軌道を5つに増やした斬撃で切りかかる！
だがオーズも両腕のトラの爪のような武器、トラクローを交差させ
防御してきた。

「やるじゃねえか…」

「フン！」

『タカ・カマキリ・バッタ！』

お。メダルを変えてきたな！
オーズ・タカキリバは腕についたカマキリソードでさっきとは違う
素早い攻撃をしてきた。
速い！

「ぐわッ！」

軽く吹っ飛んだな…
近距離はまずい！

「ならこいつだ！」

『Kamen Ride KIBA！』

『Form Ride KIBA BASSHAR！』

俺はコウモリを彷彿とさせる戦士、仮面ライダーキバに変身し、水を操る銃使い、キバ・バツシャーフォームに姿を変えた。

「はっ！」

「ぬおッ！」

水球を放つ銃、バツシャーマグナムで距離を離しつつオーズ・タカキリバを撃ち抜いた！

やはり遠距離には対応できていないな。

一気にいくぜ！

「これで終わりだ！！」

『Final Attack Ride K-K-K I B A！』

俺は特殊な水のフィールドで敵を撃つバツシャー・アクアトルネードをオーズに放った！

だが…

「ぬん！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

『スキヤニングチャージ！』

ここでタトバキック？

一体何を…と思っていると、

「うおお！」

タトバキックで水球の軌道を変えた！？

俺はあまりの驚きで動きを止めてしまった。

その隙に、

『タカ・トラ・チーター!』

オーズはタトラーターにメダルを変え、俊足を活かし逃げてしまった。

まあいいか。

あいつも本気じゃなかった気がする。
コンボとか使わなかったしな。

「そういえば…ユウスケの方は終わったか？」

少し離れた場所を見ると、

「うらあッ!」

「ぐあああああ!!!」

ちょうどマイティキックでヤミーを粉碎していた。
戦闘描写がこれだけとは…
主人公の俺とは大違いだな。

「土!オーズは？」

「ん?ああ、逃げられた」

「そうかあ…」

まあ落ち込むのしょうがないな。
捕まえて斑鳩とかいうヤツに突き出せば2000万な訳だし。
だが俺はあまり気にしていない。
それよりも…

「おい、外街エリとかいったな」

「はい」

「俺を斑鳩に会わせる。話がしたい」

こんな状況でオーズを探させたんだ。
確実に裏がある。

「…明日には対談をセツトできますが」

「今日にしろ」

「ダメですよ土君！無理を言っちゃ！」

いつの間にか近くまで来ていたなつみかんが何か言っていたがガン
無視。

こんなに迷惑をかけられてるんだ。
少しくらい無理を通さねば。

「被害者はこっちだ。無理にでも今日中にしろ」

「その必要はない！！」

うおっ！なんだこのでかい声！

そう思い後ろを振り向くとそこには…

斑鳩鴻星がいた。

第二章（後書き）

こんばっばー！

剣崎シンジです。

二章ですー！

他の皆さんの作品を見てみると自分の下手さがよくわかります…
そして一章が短すぎる！
だから二章は少し長くしてみました。

またオリキャラ紹介です。

外街エリ（そとまちえり）

里中エリカのリイマジです。

実はこのキャラは一筋縄ではいきません。

ちなみに斑鳩さんは激辛料理をよく作ります。

そのせいでかなりの辛党です。

好物は麻婆豆腐（当然のように激辛）

今回はグリードのお話を少々…

第三章（前書き）

士「今日はゲストを呼んでみたぞ…芦川シヨウイチさん？」

シヨウイチ「俺を呼ぶなあああ！！」

ユウスケ「って叫びでお馴染みの芦川シヨウイチさんです！」

シヨウイチ「お馴染みじゃない！」

夏海「特技はベルトむしり…」

シヨウイチ「違あああう！！」

士「違わないだろ…」↑被害者

ユウスケ「そうだ士。早くあらずじ終わらせないと鳴滝さん起きるんじゃないか？」

鳴滝「…」↑シヨウイチを無理矢理呼ばされた挙げ句シヨウイチにボコられて気絶中

夏海（いい気味です）

士「なつみかん何か言ったか？」

夏海「いえなにも」

シヨウイチ「…早く帰りたいのだが」

ユウスケ「あらずじー！」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事！！！！」

士「1つ！ライドベンダー隊と遭遇！…やっぱりゼクトルーパーに似ている…」

ユウスケ「2つ！オーズと戦闘！だって人襲ってんだもん」

シヨウイチ「3つ！斑鳩登場！…あいつ何者だ？」

「

第三章

麻婆豆腐とメダルとグリード

オーズとの戦闘を終えた俺たちは斑鳩ファウンデーション会長室に斑鳩と対談をしに来ていた。

そう…対談をしに来ていたんだ。
なのに…

「なんで俺たちは麻婆豆腐を作っているんだ！」
「いやオレは知らないよ!？」

斑鳩と一緒に麻婆豆腐を作っていた。

なんでも秘書の外街がまだ昼飯を食べていなかったみたいで会談はそのあとになったのだが…いつの間にか俺たちも作らされていた。

「それはそうと土君…斑鳩さんが…」
「斑鳩がどうした？」

そういつて後ろのバカでかいキッチンで料理している斑鳩を見ると…
げっ！唐辛子を超入れている！

…なんであいつの周りに大量の唐辛子のから袋があるんだろうな。
幻覚であることを祈る。

「ち、ちよつとあの量は…」

あのユウスケでさえ引いてる！

「こんなもの外街が食えるのか…？」

「絶対に無理な気がする」

「私もそう思います」

その後、みんな思い思いの麻婆豆腐を作った。

俺となつみかんは比較的まとも。少し俺の方が辛いくらいだ。だがユウスケは、

「カレー味…」

なぜだ！なぜ麻婆豆腐をカレー味にした！

それなのに、豆腐と辛めのカレーがマッチして美味い…

ま、まあ俺の方が美味しいな！

そして最後に残ったのは斑鳩の色が異常に赤い麻婆豆腐。もはや豆腐が着色されている。

絶対に食いたくない…

だがそれを外街はなんの躊躇もなく口に入れた！

し、死ぬぞ！

「…やっぱり会長の麻婆豆腐は最高です」

…こいつの味覚はどうなっているんだああああ！！

シヨウイチが食べたらアギト・バーニングになるくらいの唐辛子だぞ！

「ああ、そうだ言い忘れていたね」

斑鳩が話しかけてきた。

今度はなんなんだ。

「外街クンは辛党だよ」

…だらうなあああ!!

あれで甘党とか言われても信じられねえよ!

俺たちが本題を思い出したのはこの30分も後のことだった。

「それでオーズのことだか…」

早く事情を説明してくれ。

これ以上何も知らないまま巻き込まれるのはごめんだぜ。

「実は少し前までは共に戦っていたのだよ」

「それは知ってます。外街さんが教えてくれましたから」

「そうか…じゃあオーズのことを話そうか」

能力?…ああ、メダルのことか。

「オーズはオーメダルという800年前にとある錬金術師が作ったメダルを使って変身している。そしてオーメダルにはコアメダルとセルメダルの2種類が有り、オーズはコアメダルを使い変身している。その他にもバースという仮面ライダーがいるが、彼はセルメダルを使っている」

へえ、そんなライダーがいるのか。

「そのコアメダルを核とした欲望の怪物、グリードというモノもいるのだが、今は関係がないので割愛しておこう」

面倒くさいから飛ばしたと思うのは俺だけだろうか。

「このオーメダルは、今の技術では製造ができない。少し前まではそれが常識だった」

「少し前まで？」

「コアメダルの製造に成功した者がいる」

なんだと！？

「その者の行方はわからないが、名前は竜ヶ崎シンゴ。ウチの研究科で働いていた」

「で、それがどうかしたのか？」

確かにすごい話だが、あまり関係がないように思える。

「実はその頃からなのだよ…オーズが人を襲い始めたのは」

「ってことは…お前はその竜ヶ崎ってヤツがオーズに何かしたと思っ
っているのか？」

コアメダルを介しての洗脳とか？

「そうだ。もしくは人を襲うオーズはそのレプリカのコアメダルを
使った偽者が…」

偽物…そういう見方もあるな。

「オーズのベルトは作れなかったのか？」

今のはユウスケだ。

「それが分かれば苦労はしないよ……」

「だろうな。分かれば本物が偽者かくらいは分かるからな」

「ってことは何もわかってないのか」

……うん、俺が言うのもなんだけどな。

もうちょっとオブラートに包もうぜ？

「……とりあえずオーズを探してくれないかね」

「……どうせもう説明がめんどくさくなっただんでしよう」

「はっはっは。何を言うんだ外街クン。そんなことはないよ」

棒読みだし……

まあ迷っていても仕方がない！

オーズを探しに行くか！

く
とある廃墟

ここは斑鳩ファウンデーションがある街の隅。

そこでは人ではないモノ達が生活していた。

「最近オーズはどうしたんだろうね……」

黄色い猫を思わせる風貌をしたグリードのカザリが呟いた。
すると、

「俺たちのヤミーを助けていることか？別に害は無いのだから問題ないだろう」

それに緑の昆虫系グリードのウヴァが返答した。

「だけどねえ…急にああなると少し薄気味悪くない？裏があると思えてならないんだよね…」

「考えすぎではないか？」

「ならいいんだけど…」

その会話の横では灰色を基調としたグリードのガメルが、

「メズールう…」

といなくなってしまった青い水棲系グリード、メズールを想って落ち込んでいた。

「…まあ確かに、メズールはどこに行ったんだろうね」

「俺はそのうち帰ってくると思うが…」

「メズールうー！」

「泣き始めたし…」

ああもう面倒だなあ…とカザリは思いつつ、新たな不安要素を口にした。

「あとオーズはいるのに、なぜかアंकが一緒にいないんだよ」

「そつえば…俺のヤミーの時もそうだったな…」

「まさか、オーズとアंकは既に決別している…？」

「別行動しているだけではないか？」

「でも僕たちのヤミーを助けてアंकにメリットがある？」

「それならオーズもだろう」

「よく分からないね…」

そこでウヴァが話題を変え、

「そういえばあのヤミーはどうなっている？」

「順調に育ってるよ。もうすぐ行動できる」

「そうか。俺も新しいやつを作るか…」

そしてグリードは新たなヤミーを作るために街へ向かった…

第三章（後書き）

三章キターツ！！な剣崎シンジです。
ちやおつすー。

お詫び

本当は前回の話し通りグリード中心にするつもりでしたが、欠員で映えないメンツになってしまったので伏線に使うために最後に入れました。

申し訳ありません。

今回なぜか頭良さげに見えるウヴァさんですが、普通にバカです。
グリードの頭脳派キャラと言えばアंकとカザリとメズールですね。

メズールは少し2人に劣りますが。

そのメズールですが、ちゃんと行動しています。
個人的にはメズールが好きなので早く出したいです。
アंकは…そのうち出ますよwww

それと、平成仮面ライダーを総て観てきたボクですが、フォーゼだけは観る気が起きません…

どなたかボクにフォーゼの面白さを教えてくれませんか？
ちなみに一番好きなシリーズはカブトです。
かっこいいですよねー♪

次回はオース再び！？

第四章（前書き）

士「俺、この話で鳴滝を殺すことに決めたんだ…」

ユウスケ「個人的にはやめてほしいけど…アークルくれたし」

夏海「私は殺つてほしいです」

ユウスケ「夏海ちゃん!？」

士「…今回のゲストはこちら!」

モモタロス「俺はいつでもクライマックスだ…」

士「なぜ貴様がいる」

モモタロス「ブヘラボツ!!」

ユウスケ「…すいません。間違えたみたいなので本当のゲストさんどーぞ!」

海東「やあみんな」

夏海「あ!本編で全く出番が無くてついにはゲストで出てきた海東大樹さんです!」

海東「ひどつ!」

ユウスケ「でも確か…初期設定ではもう出てきてるはずなのに…」

士「作者いわく、動かしにくくてほっといたらそのままになってた、だそうだ」

ユウスケ「ああ!そこで救済策として…って訳なのか!」

夏海「可哀想ですなぁー」

海東「…もう嫌この面子」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事!!!」

士「1つ!斑鳩と麻婆豆腐を作る!…食わされなくてよかったぜ…」

ユウスケ「2つ!斑鳩さんにオーズの話を聞く!」

海東「3つ!グリードの怪しい動き!…結局グリードについて説明あった?」

士ユウ夏「「「ない「「「

第四章

幽霊と虎場と黄色グリード

「ぎいやああああ！！！！」

「出たーッ！！」

俺たちは薄暗い森の中を爆走していた。
事の発端は一時間前に遡る…

「ホントに広いなよなーこの街」

俺たちは斑鳩との話を終え、オーズを探しに街に出ていた。
そんなときにポツリとユウスケが言ったことがこれだ。

「今更なんだ…この街に来てもう5時間近く経っているぞ」

そう…色々あつて街をあまり歩いてはいないがここに来て5時間経
っている。

俺たちどんだけ斑鳩のトコにいたんだよ…

「でもさあ？まだ街のことよくわかんないよな」

「まあそうだな」

「なにか嫌な予感がします…」

奇遇だななつみかん。

俺もなんだ。

「探検しようぜ！」

「…は？」

そして今に至る。

過程？…恐ろしくて思い出したくもないぜ。

「ああ…イライラするげぶあッ！」

なんか紫の蛇みたいなヤツを蹴り飛ばした気がするが無視！

それよりあいつから逃げなければ！

ていうか…

「なんでビートルファンガイアの霊が追いかけてくるんだよおお
！…！」

そう、今俺たちを追っているのは、ワタルの父のビートルファンガイアだった！

しかも幽霊！

ワタルワタル言ってるし！

ちなみにワタルとはとある世界であつた仮面ライダーキバに変身する子供だ。

細かいことは割愛。

もつと説明がほしいって？

ははは、状況見るよ

「土！前見る、前！」

「は？」

「なんだっ たんだ今の… あ！大丈夫ですか？」
「あ、はい。本当にありがとうございます…」

なつみかんが少し引きながら礼を言う。

ユウスケなんか驚きすぎて言葉が出ていない。

「ならよかった。ボクは虎場エイジ。よろしくね。」

思ったよりフレンドリーだな…
まだ当然怖いが。

「俺は門矢士だ」

「私は光夏海です」

「オレは小野寺ユウスケ」

各々自己紹介を終えたところで、エイジは質問をしてきた。

「皆さんはなんでこんな山奥へ？」

山奥まで来てたのか…

山に入っ てすぐに追いかけられたのにな…

「さっきのお化けに追いかけて…」

「あー…時々出るんだよね、ここ」

「もうこんな所にいたくないです！」

同感だ… と思っ ていたその時、

「しゃあなあ！！！」

猫が威嚇するような声が聞こえたので、そちらを振り向いてみた。すると、ちょうど猫みたいなヤミーが突進してきているところだった。

「あ、でかい猫だー」

「「いやいやヤミーだろ（ですよ）！？」」

「え？マジで？」

こいつホントにどうなってるんだ…？

まあいい。

とりあえずはヤミーを倒そう！

「エイジ！下がってる…って危ないから前にいくな！！」

「まあボクに任せて下がってなってる」

そしてエイジが取り出したのは3つの穴がついたドライバー…まさかこいつが！？

「変身！！」

『タ・ト・バ』タトバタ・ト・バ』

「え、ええーっ！？エイジさんがオーズ！？」

「うん？そうだけど？」

でもこいつが人を襲うかあ？

まあ今はいいか。

「お手並み拝見だな」

「よーし！さくつと倒すぜ！そりゃあ！」

エイジはバツタレッグで翻弄しつつトラクローで猫のヤミーを切り

裂いていく！

…助けは要らなそうだな。

「弱いなこのヤミー！じゃあ倒すよ」

『スキヤニングチャージ！』

「せいやあああー！」

3つの輪を通り抜けながら、タトバキックで猫のヤミーを倒そうとするエイジ。

しかし、急に1と2、2と3番目の輪の間に、木や岩が飛んできた！

「うわっ！？」

そのせいでタトバキックの軌道が逸れ、猫のヤミーに当たらなかった。

一体何が…

ツ！木の裏に気配！

「誰だ！」

「…そのヤミーはやらせないよ。まだ成長途中なんだ」

出てきたのは猫を思わせる黄色の『何か』だった。

「グリード…！」

グリード！あいつが…。

斑鳩に説明をハシヨられた悲しい生き物が…。

「グリードって何なの！？」

「グリードは…簡単に言えばヤミーの親玉かな？あいつはカザリッ

て名前だ」

親玉か…なら強いんだろう。

「エイジ。手を貸すぞ」

「え？どういう…」

「変身！！」

「じゃあオレも！変身！！」

『Kamen Ride DECADE ！』

「ええ！？変身した！」

「オーズの仲間かい？…まあ一緒に倒すけどね」

そう言うとかザリはカードと四角い箱のようなモノを取り出した。
あれは…！

「ラウズカードだと…！？」

仮面ライダーブレイドが使うランプのようなカード、ラウズカードだった。

なぜこの世界にラウズカードが…！

「知ってるの？…これは帽子を被ったおじさんにもらったのさ」

…絶対鳴滝だな。

いつか殺すあの野郎。

そしてカザリは右手首に箱のようなモノ、恐らくラウザー…ラウズカードをスキャンするためのモノ…を付け、カードをスキャンした。

『Slash』

その音声と共に双剣がカザリの両手に召喚され、斬りかかってきた！
速ッ！

「はぁッ！」

「くっ！」

俺はなんとかライドブッカーをソードモードにして防ぐ。
だが、

「甘いよ！」

「ぐぁぁッ！！！」

「土っ！」

がら空きになった腹を蹴り飛ばされた。

いつてえ…

今度はエイジに向かってカザリが横薙ぎに剣を振るう。

「君の番だ！」

「おわっ！」

うまく右はかわした。

だが、左は直撃してしまう！

「うわぁッ！」

「エイジ！この…超変身！！！」

カザリがエイジを吹っ飛ばした隙にユウスケは青の戦士、ドラゴンフォームに姿を変え、近くに落ちていた木の枝でドラゴンロッドを生成し、素早い動きで一気にカザリに詰め寄った！
だが、

「じゃあこれで」
『Metal』

カザリがカードをスキャンしてしまう。
するとユウスケがロッドで殴り付けるも、弾かれてしまった。

「硬ッ！」

その衝撃でユウスケはロッドを手放した。
そこに、

「隙有り！」
「ぐあッ！」

カザリの一閃！
ユウスケまでやられた…
それなら…！

「速さには速さだ！」
『Kamen Ride 555！』
『Form Ride 555 Acceler！』

俺は仮面ライダーファイズに変身し、ファイズ・アクセルフォーム
にフォームチェンジした。
これで十秒だけだが超高速で戦える…！

「僕はもつと速くなるよ」
『Mach』
「いくぜ」

『Start Up』

俺とカザリは高速の世界で殴り合った。
だがこっちはクロックアップと渡り合ったアクセルフォームだ。
段々とカザリは追い付かなくなってくる。

「は、速い！」

残り時間もあとわずかなだ。
よし！

「決めるぜ！」

『Final Attack Ride 5・5・5・555！』
『three』

俺は足からポインターを飛ばし、カザリに狙いを定める。

『two』

そしてそのポインター目掛けて蹴りを放つ！

「うおおお！！！」

『one』

俺は一度ポインターの辺りで姿を消し、カザリの後ろに出てきた。
そして、

『Time Out』
「ぐわあああ！！！」

タイムアップだ。

だが、まだ力ザリはやられていない。

「しぶといな…」

「強いねキミ…じゃあしょうがないな…逃げさせてもらっよ…」
『Thunder』

すると、目の前に雷が何発も落ちてきた！

眩しッ！

そして、雷が止んだ頃には力ザリの姿はなくなっていた…

第四章（後書き）

こにゃにゃちわ〜♪

剣崎シンジです。

更新が昨日はできませんでした。
申し訳ありません。

えーと今回は虎場エイジさんが出ました。

これで大体落ちが読めてしまったかと思いますが、頑張つて予想を（いい意味で）裏切りたいので、飽きずに読んでもらいたいです。

カザリがラウズカード使いました！

ちなみにあれは一枚ずつしか使えなくなっています。（だからライトニングスラッシュとか使えません）

その代わり、カードの効果は強化されています。

だからファイズ・アクセルについていける速度が出せました。
でもやっぱり少し遅いですけど。

全然関係ないのですが、最近急にオーデイン対ベルデの闘いが見てみたくなりました。（実際はやってません）

皆さんはどんな闘いがみてみたいですか？

今回はアंक登場！そしてオーズの真相が！？

第五章（前書き）

士「…オンドウルルラギッダンディスカ！」

ユウスケ「Σどうしたいいきなり！？」

夏海「…実は今回出てきたあの人の代わりに乾巧が出る予定だったらしいですよ」

ユウスケ「…それが？」

士「乾巧だったら熱いウドンでも啜らせておけば勝てたのに…」

ユウスケ「無理だな」

夏海「じゃあ今日のゲストにいつてみましょう！」

ユウスケ「今日のゲストはこちら！」

アスム「こ、こんにちは」

士「人畜無害キターツ！！」

ユウスケ「アスムくんです！」

夏海「…久々のまともな人…！」

ユウスケ「じゃあこつちもまともな質問しなくちゃ！」

夏海「えーと…ご趣味は？」

士「お見合いか！？」

アスム「鍛えることです！」

ユウスケ「…尊敬している人は？」

アスム「師匠…海東さんです！」

ユウスケ「あんなヤツ、尊敬しちゃダメだよアスムくん」↑笑顔でアスムの肩を掴んでいる

夏海「これ以上はアスム君に悪影響なのであらずじにいきましょう！」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事…！！」「」

士「1つ！幽霊に追いかける！しかもワタルの父さん！」

ユウスケ「2つ！エイジさんと遭遇！ってオーズに変身した！？」

アスム「3つ！グリードのカザリと戦闘！…ラウズカードを使って
までして士さんに勝てないなんてただの雑魚ですね」
カザリ「言わないでーッ！！」

第五章

アंकとあいつと2人のオーズ

「さあーって！カザリは土が追っ払ってくれたし…待てやコラ」

エイジの言葉と共に、びくうッ！という効果音が似合う挙動で、そこそ逃げようとしていた猫のヤミーが動きを止めた。

「逃げれると思ってんの？…とりあえず土。あいつの中には人が入ってる。引っ張り出せるか？」

人が…あいつは太ってるからな…

「…外の肉が邪魔だな」

「それなら高速で同じ場所を攻撃すると段々削ぎ落とされてくよ…フィニッシュはボクがやるから残しといてよ」

…笑顔が怖すぎる…
ていうかまた高速戦か…

「それならこいつだな」

『Kamen Ride KABUTO!』

おばあちゃんは言っ t (ry
これなら天の道を司れたり…はしないが、クロックアップならできる。

原作ネタ？

なにそれ食えんの？

Attack Ride Clock Up!

これを使うと、まるで周りが遅くなったかのように感じる。

この景色は好きだ。

…誰も俺についてこれないからな！

よしこれで猫のヤミーに近づいて……

「はあああ！」

殴って殴って殴りまくる！

するとセルメダルが剥がれてきて中の人が見えてきた。

そろそろいいだろ。

Clock Over

「ほッ！」

そして俺はクロックアップを解除して一気に中身を引き抜く！

大量のセルメダルと共に人が出てきた。

よっしや！

するとエイジが前に出てきて、

「あとはボクに任せろ…カザリへの恨みつらみ、責任取ってお前が受けるッ!!」

「え、ちょっとエイジさん……？」

「スキヤニングチャージ！」

「砕け散れええええええ！！！」

「みぎやあああ!!!」

…エイジ容赦ねえーッ！

タトバキックで粉々だよあの猫！

…カザリに対する恨みどんだけたまってたんだよ…

もう変身解除していいよな…

そして何気なく周りを見てみると、木の影に何か光っているものが。

「何だあれは？」

近づいて手に取ってみると、それは黄色のメダルだった。

「これは…ライオンのコアメダルか…」

「土ー！なんか銀色のメダルがいっぱい落ちてるぞー！」

お、ユウスケはセルメダルを見つけたみたいだな。

…とりあえずエイジが敵か味方か見極めるまでこいつは持っておくか…

「土ー？」

「今行くから待ってる！」

ユウスケの方へ行くと、ヤミーがいた場所に大量のセルメダルがあった。

あのヤミーこんなにメダル貯めてたのか…

にしては弱かったな…

それと…見たことないヤツもいた。

茶髪でガラの悪い青年だ。

「おいユウスケ…こいつ誰だ？」

「いや…俺もよく…」

「そいつはアंकだよ」

ユウスケじゃなくてエイジが答えてくれた。

アंक…？

外国人か何かか…？

「おいエイジ！ここは一応左倉シントロウって名乗るべきだろうが！」

左倉シントロウ…？

アंकじゃないのか？

「あー…こいつは左倉シントロウって人にくっついたグリードでアंकってゆーんだ。左倉さんはライドベンドー隊の隊長らしいよ」
「今は俺が隊長だ！それよりこいつがさっき言ってた力ザリを退けたヤツか…？」

アंकがじろじろ見てくる。

気持ち悪い…！

それよりも、

「何かこいつとキャラが被ってる気がする」

…ああああああ！！！！

もう駄目だもうアウトだ！

完全にキャラが被ってしまった！

「つ…土…？そんなに気にしなくても…」

「ユウスケ！お前は事の重大さに気づいてないんだ！」

「そうだ！キャラが被るってことは『このシーンでつつこみはこい

つがいるからこいつはいいや』みたいなことが起こり得るってことなんだぞ!!」

「…ごめんな、色々と」

そんなことを話しているとき、突如森に殺気が充満した。
何だ…？

「おいお前ら…一応用心しとけよ」

「あれ？土、上からなんかきてるよ」

は？

つて上から灰色のオーロラがあああ!!!

「うおッ！」

「何これ？」

エイジも飲まれたし！

どこに飛ばされるんだ!？

「ここは…」

俺はまるで宇宙のような場所に来ていた。
前にも来たことがあるような気がする…
確か…

「最初にカードをもらった場所だな」
「その通りだ」

後ろから声が！

「誰だ！」

「…俺は剣崎一真…貴様を殺させてもらっ！」

はあ！？いきなり何だよ！？

だが雰囲気はやバめだな…

まあやることは決まってる。

「はっ！お前に俺が殺せるか？」

「楽勝だな…本気を出すまでもない」

言うじゃねえかこいつ…！

「それなら本気を出せないまま倒されちまうんだな！」

「えーとさあ…ボクも闘つていいの？」

「いいぞ。全く問題ない。むしろ2人でないと手応えが無さすぎる」

こいつ本気で殺す。

破壊者らしく壊してやる！

だが…

「「変身！」」

『Kamen Ride DECADE！』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！』

「…変身」

『Turn Up』

「何ッ！？何故お前が…カズマじゃないヤツがブレイドに変身する！？」

そう、あいつはカズマが変身するはずのブレイドに変身した。
カズマとは俺が旅をした世界の内の1つ、ブレイドの世界の人間だ。
よくチーズって言われてたなあ…。

「お前が知っている世界が全てではない。それだけだ。いくぞ！」

くっ！今は気にしてられないな！

あいつを倒すことに集中しなければ！

ブレイドは接近戦特化だからな…

まずは…

「こいつだ！」

『Attack Ride BLAST！』

幾重にも分かれた銃撃が多方面からブレイドに襲いかかる！

「ふっ！」

が、体を銃撃と銃撃の間に割り込ませることで、そのまま突っ込んでくる。

闘い慣れてるな…

それならあえて接近戦だ！

2対1だけどな！

「エイジ！」

「わかってる！」

『タカ！カマキリ！バッタ！』

「せいッ！」

「甘いな」

「ぐわっ！」

オーズ・タカキリバはカマキリソードでブレイドに斬りかかる。
が、かわされて一撃食らわせてしまう。

まあ、エイジには悪いがここまでは計算通りだ。

エイジには悪いが。

なつみかん達の方も何か起こるかもしれないからな。

短期決戦だ。

『Final Attack Ride D-D-D-DECADE!』

「うおおッ!」

「ふん」

『Thunder・Kick・Mach Lightning Sonic』

そこで、ブレイドも雷を纏った高速キック、ライトニングソニックを放ってきた!

だがな、まだあいつがいるんだよ!

「…この野郎おおお!!!」

『スキヤニングチャージ!』

「せいやあああ!!!」

「ぐおおッ!」

よっしゃ直撃!

うまくいったぜ。

まずはエイジにわざと攻撃させて怒らせ、その怒りの力を相手にぶつける!

ちなみに俺のはブラフだぜ!

「…中々やるな」

何ッ！？まだ倒せてないのかよ！

「そろそろ本気を出してやる」

『Absorb Queen Evolution King』
「キングフォームか…」

まさかなれるとはな…

このままじゃまずいな。

その時、エイジがブレイドに突っ込んでいつてしまった。
まずいッ！？

「待て、エイジー！」

「そらッ！」

エイジがカマキリソードを振り下ろす。

肩に直撃！

…だがやはり、

「効かんッ！」

「うわあああ！！」

全く効いていない。

鎧に傷すらついていない。

しかもただの拳でオーズ・タカキリバが15メートル程吹っ飛んで
しまった。

どんな馬力だよ…！

「くそ、力で無理矢理押すか…！」

『Kamen Ride HIBIKI!』

「はぁッ！」

「ふん！」

俺は力に定評がある鬼の戦士、仮面ライダー

響鬼に変身し、パンチを繰り出した！

ブレイドも同じくパンチをして、俺の拳と衝突したが、

「ぐあああ…！」

力がライダーの中でも突出している響鬼ですら吹っ飛ばされる。
どうすればいいんだ…！

「そんなものか…もういい」

『Royal Straight Flash』

ブレイドと俺の間に5枚のでかいカードが配置された。
やられる…！

その時、また灰色のオーロラが現れ、人が出てきた。

「…一真、もうそれ位でいいんじゃないか？」

「城戸か…」

「オレはコイツらは十分強いと思う。お前をキングフォームにさせ
たぐらいだからな」

何だ…？状況がよく分らん…。

今俺を殺そうとしたヤツの仲間っぽいヤツが俺たちを擁護している
…？

「もうコイツらなら大丈夫だろ？」

「…そうだな。すまない。少し楽しくなっちゃってしまっただけ」

すると、城戸と呼ばれていたヤツがこちらを向き、

「すまなかったね、門矢士くん。本当は君の、いや君たちの力を試したかったんだ」

「試す…？」

「そう、あいつに勝てるかどうかね…」

あいつ？誰のことだ？

頭の中を疑問符だらけにしていると、城戸がカードを取り出してこちらに投げてきた。

「これをあげよう」

「…これは」

「君が本来持っているべき力だ」

そのカードには、クウガからディケイドまでの10人のライダーが描かれていた。

そうか…

「大体わかった」

やるべきこともな。

「とりあえず、もとの場所に戻してくれ」

「そうだな。…頑張れよ」

そして俺たちは再び灰色のオーロラに包まれていった…

「土！」

「土くん！」

目を覚ましたら、そこはもと居た森の中だった。
戻ってこれたか…

「やっと帰ってきたか。オーズと…ディケイド」

後ろから声がした。

知らない声で。

振り向くとそこには…

オーズが立っていた。

第五章（後書き）

おっはーっ！！（現在は朝ではありません）

そろそろ挨拶ネタが尽きてきた剣崎シンジです。

真にすいませんが、

これから2日に一回くらいの投稿スピードになると思います。
ご了承ください。

剣崎さぁーん！何やってんのー！な五章です。

ホントに今回は剣崎さん無双でした。

ついでに城戸さんも出てきましたが。

城戸さんが土に何を渡したかはまだ秘密です。

もうわかった人も出てくるのかな？

それと土はまだコンプリートフォームになれません。

ネガの前の設定です。

そんな土にキングフォーム使う剣崎さんマジ鬼畜。

何気にまだライオンを渡していない土。

次回渡しますよ多分www

次回はオーズvs・オーズ（時々ディケイド&・クウガ）！
偽物の正体が明らかに（なるかもしれません）！？

第六章（前書き）

士「…俺が負けた…だと？」

ユウスケ「誰に？」

夏海「剣崎一真さん」

ユウスケ「…そりゃ負けるだろ…」

士「俺は破壊者なのに…」

士「今日のゲストはこちら！」↑笑いのツボで完全復活

カズマ「お久ー！チーズ！」

士「チーズじゃないチーズだ！」

ユウスケ「…これもお馴染みだよな」

夏海「はい」

ユウスケ「…今回のゲストは士をボコしたヤツと同じブレイドの剣立カズマさんです」

カズマ「そんなことあったの！？」

士「…orz」↑再発

カズマ「まあディケイド程度でブレイドに勝てるはずか無いんだよね」

士「もう死にたい…orz」

夏海「Σ早まらないでください！」

ユウスケ「あらすじー」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事…！！」「」

士「1つ！猫ヤミーをエイジが爆砕…！怖し」

ユウスケ「2つ！ブレイドと闘い敗北！剣崎さんマジオンドウル」

カズマ「3つ！謎のオーズが現れる…！もう大体わかったの俺だけ？」

士「言わないでくれ頼む！」

第六章

コンボと敗走とおやすみなさい

俺の前にはオーズがいる。

右にある木の近くにエイジが寝ているのに、だ。

「…お前は誰だ？」

「竜ヶ崎シンゴ…まあ言っても分からないだろうがな」

…いや。そんな事はないぞ。

その名前には聞き覚えがある。

斑鳩のおっさんが確か言っていたな…

『コアメダルの製造に成功した者がいる』

『その者の行方は分からないが、名前は竜ヶ崎シンゴ』
つてな。

「何故ここにいる？」

「偶然だ」

俺はディケイドライバーを装着し、ディケイドのカードを取り出した。

「それなら質問を変えるか。何故ヤミーを助け、人を襲っていた？」
「…！」

そう言う偽オーズは驚愕した。

気づいてないとも思っていたのか？

…こいつ案外バカだな。

ていうか10も20もオーズがいてたまるか！
すると、

「…ひやははッ！…よくわかったねえ！！」

「ッ！？」

何だこいつ！？急に人が変わりやがった！？

「まあバレたんなら仕方ないねえ…殺すか」

「ッ！？変身！！」

『K a m e n R i d e D E C A D E !』

殺すだと？

前に負けたのにどこからその自信が来るんだ？
その時、

「ううん…こじどじ…？」

エイジが目を覚ました。

いいタイミングだ！

こいつを使うか！

「士…？オーズがいる…って、え！？オーズ！？」

「エイジ！こいつはお前のフリをして人を襲っていた偽物だ！」

「は？偽物？…俺の？…そうか…」

上手くいったぞ！エイジの怒りのボルテージが上がっていく！
すると、エイジはオーズドライバーとメダルを取り出し、

「お前殺すわ」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

オーズ・タトバコンボに変身して偽オーズに殴りかかる！

すると偽オーズもドライバーのコアメダルを抜いてメダルを取り出した。

銀色の3枚のコアメダルを。

まさか！

「見せてあげるよ…本当のオーズをねえ！！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーズッ♪サッゴーズオオ！！』

銀色の光が視界を遮った。

その光が収まると、そこにいたのは…

銀色の堅牢な鎧を身につけ、頭にサイの角、腕には巨大なゴリラの腕、脚はサイの脚を思わせる仕様になっているオーズ・サゴーズコンボだった。

そして偽オーズ・サゴーズコンボは、

「ウオオオオオオオ！！！」

いきなりドラミングを始めた！

するといきなり上から重圧がかかり、跪くような体勢になってしまった！

「ぐあっ！」

「…これは重力操作か」

「ご名答！さあこれで動けないよなあ？ゆっくりなぶってやるよお！」

まずいな…動けねえ。

だがこれくらいならパワーがあればなんとかなるな。

『K a m e n R i d e D E N - O ! 』

『F r o m R i d e A x e f r o m ! 』

俺は斧の意匠をした黄色と黒主体のライダー、仮面ライダー電王・アックスフォームに変身し、

「うおおッ!!」

パワーに特化したフォームらしく、無理やり立ち上がる!

「はあ?立てんの!?わっけわかんねえー!」

訳分かんないか。

それなら…

「そのまま倒されとけ!」

そう言つて手に持った斧、デンガッシャー・アックスモードで斬りつける!

「無理無理い!」

だがサゴーズコンボの巨大な腕パーツ、ゴリバコーンであっさり防がれてしまった。

だがそれでいいんだ。

なぜなら…

「エイジ！」

『サイ！トラ！コンドル！』

「せやッ！」

「あ！重力操作解けてやんの！」

エイジ（怒りモード）がいるからな！

エイジはオーズ・サトラドルにコンボチェンジしてトラクローで斬り、

「せいッ！せいやああ！！！」

「うおう！」

鋭い爪を持ったコンドルレッグで切り裂き、尖った角を持ったサイヘッドで突き刺した！

俺もおまけでデンガッシャー・アックスモードで今度こそ一撃食らわせる！

「はあッ！」

「ぐおおっ！」

偽オーズ・サゴーズコンボは地面を転がり木にぶつかった。

これなら勝てる…！

だが、

「まだまだだよ…コンボはまだまだあるんだからねえ！！！」

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜』

「なっ…！？」

偽オーズは赤い瞳を持つ鳥の王、タジャドルコンボにコンボチェン

ジした。

「今度はタジャドルか…！」

「でもまだダメージは残ってる！勝てるはず…」

「ダメダメえっ」このコンボは一味違うから…ねえッ！」

そう言うのと、背中の中3対の羽、クジャクウィングを展開して空に飛び立った。

空か…なかなか高いな。

「エイジ…ウナギあるか？」

「あるけどあれは落とせないな…」

「何かコンボはできないのか？」

「生憎とあんまりメダルを持ってなくてね…」

そうか…

じゃあ俺がやるしかないか…

そう決めた直後、空から、

「届かないのかあ！？でも俺様は届くんだなあ…！」

という声と共にクジャクアームの腕についている丸い形をした武器、タジャスピナーから放った火球が降ってきた！

「…うわあああ…！」

エイジと共に間一髪でダイブ！

危ねえッ！

当たるかと思っただけ…

「あの野郎…！」

『From Ride DEN・O Gun from!』
「食らえッ！」

今度は電王・ガンフォームに変身して、デンガッシャー・ガンモードで頭上を飛んでいる偽オーズを撃ち落とそうとする。
だが、

「当たらないよぉ！」

すばしっこく飛び回って一発も当たらない。

「くっ！ライダーを変えるか…！」

さすがに無駄だと思い、撃つのを止めたその瞬間！

「この時を待ってたぜえ…！」

『スキヤニングチャージ！』

「ひやはははぁぁッ…！！！」

偽オーズ・タジャドルコンボは3つの赤い輪を突き抜けながら、コンドルレッグをクロー状に変形させて炎を纏つての両足蹴り、プロミネンスドロップを放ってきた！

「くそッ！エイジ逃げろッ…！」

「お前も逃げるんだよ土！」

「当たり前だろ！こんなところで死ぬなんてまっぴらだ！」

そう言っただけで俺たちは走り始めた。
だがもう偽オーズ・タジャドルコンボはすぐそこまで迫ってきてい

クウガはそう言って俺を担ぎ、カプセルのライダーはエイジを担いで走った…

「逃げられたかあ… まあいつでも倒せるし大丈夫かなあ」

〈光写真館〉

俺たちは光写真館で治療を受け、変身を解いたヤツを見て驚いていた。

「あのライダーはアंकだったのか…」

「ああ。仮面ライダーバース。それがあれの名前だ」

斑鳩がいったヤツか。

それにしても…

「強いな… あの偽オース…」

「当たり前だろ。あいつは俺とガメル… 銀色のコンボを使ったんだろ？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「ガメルはほとんどメダルを取られて無いんだ。その状態であいつがサゴーズを使ったのなら、人工のメダル… ギジメダルとも言っておくか。それは…」

「もうほとんどのメダルが作られている… ということか」

それはまずいな…

全種類コンボ使い放題は卑怯だろ。

「だが普通はコンボにも弱点がある」

「「弱点!?!」」

俺もユウスケもアंकの話に食いついた。
当たり前だ。

あんなチートに弱点なんか思い付かないからな。
だがアंकの話はいいものではなかった。

「コンボってのは普通は負荷が大きすぎて連発や長時間使用ができないんだ」

「ん?アंक、あいつは連発してたぞ?サゴーズからタジャドルに」
「だから言っただろ。普通はってな。どんな効果があるかは分かんが、ギジメダルはコアメダルよりも負荷が少ないらしい」

あの強さで燃費もいいのか…

俺らしくないが、勝てる気がしない。

「化け物だな…」

「だが負荷が少ない分コアメダルよりも出力は落ちてるはずなんだ」
「あれで出力が落ちてる!?!」

信じられん…

「…とりあえずお前らもう休め。もう遅いしな」

「アंकは?」

「ライドベンダー隊で森の戦闘の証拠隠滅だな」

あいつも大変だな…

「まあ疲れはなるべく取るべきだな」

「確かにな」

そろそろ寝るか。

「じゃあおやすみ」

「ああ…」

そうして俺は夢の世界へ落ちていった…

第六章（後書き）

こんにちはー！

ついにあいさつネタが尽きた剣崎シンジです。

2日に一回投稿、ギリギリアウトです。

ごめんなさい…

今回の話はタジャドル強し！

以上！

ごめんなさいもはやバスさんていうかアंकさん霞んです。
バスorアंकを好きな方には謝ります。
すいませんでした。

ついでにサゴーズも霞んでる気がs（ry

次回は土の夢の話にgo！

土は夢の世界を破壊するのか！？

第七章（前書き）

士「ひどい目に遭った…」

ユウスケ「そんな夢だけで大袈裟な…」

士「お前もあんな目に遭ってみろ…死にたくなるぞ」

夏海「Σどんだけ怖い夢ですか！」

士「今日のゲストはこちらー…」

タクミ「こんにちは…って士さん！？」

ユウスケ「今日のゲストは尾上タクミ君でーす！」

タクミ「何で士さん死にかけてるんですか！？」

夏海「悪夢を見たらしいですよ」

タクミ「悪夢…？士さんをあんなにするなんて…どんな夢ですか？」

士「思い出すのも嫌だ…」

ユウスケ「ていうか士。タクミ君って貴重な普通の人だよな？」

士「周りと比べればな」

ユウスケ「アスム君、タクミ君と来たらもうほとんどワタルくらい
しかないような…」

士「…今日でこの作品終わらせるか」

夏海「Σ夢で終わらせますか！？」

タクミ「あらすじいきまーす！」

ユウスケ「ごめんタクミ君、愛想尽かさないで！」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事…！！」「」

士「1つ！オーズ（偽）と遭遇！気味が悪い口調だったぜ…」

ユウスケ「2つ！オーズ（偽）と戦闘！タジャドルマジチート！」

タクミ「3つ！バースの力を借りて撤退！…士さん負けましたね」

士「これ以上俺をいじめるなあああ…！！」

第七章

夢と管理者とクイズ大会

「ここは…？」

俺はいつの間にか真っ白い空間に来ていた。

俺は確か…写真館で寝て…その後は？

記憶にないな…

「まさか…ここは夢の中か？」

ってどこのメルヘン野郎だよ！

自分で言って虚しくなった…

だがそこで以外な返事があった。

「そうだ…正確にはあなたの夢を借りて俺達がお前にコンタクトを取っている」

声がした方を見ると、そこには見覚えがある者がいた。

確か…

「剣崎一真…だったか？」

「ああ。他の奴にもいるぞ」

そう言われて辺りを見回すと、城戸と呼ばれていた青年や、旅が始まる前にカードを俺に渡したヤツなどがいた。

「…で、何のようだ」

「僕達はあなたを試しに来たんですよ」

「試す？」

「…俺達は心配になったんだ。お前が酷い負け方をしたからな」

そう言ったのは豆腐を持って天を指差している男だった…豆腐？

「おい…何でお前は豆腐を持っている？」

「お前じゃない。…俺は天の道を行き総てを司る男…天道総司だ」

「多分、急な召集だったからじゃないかな。あ、おれは津上翔一。よろしく」

今度は笑顔で手を振りながら茶髪の男が自己紹介してきた。

「…乾巧だ」

「あの…もうちょっと愛想よくした方が…あ、ボクは野上良太郎です」

「僕とは会ったことがありますね。紅渡です」

「よう青年！俺はヒビキだ」

「俺は城戸真司。よろしく」

「…で、五代はまた来てない…か」

「どうせ旅してるんですよ」

各々自己紹介が終わったので（俺のことは何故か全員に認知されている）、本題に入る。

「…それで俺の何を試すんだ？」

「知識ですよ」

「知識？強さじゃなくてか？」

「そうだ。お前に足りないのは状況判断に必要な知識だと多数決で決まった。…俺は強さだって言っただけだな」

「よって、クイズ大会をする事に決定しました♪」

…は？

「クイズ大会いい！？」

「…やっぱりお前もふざけてると思うよな！？」

「うるさいですよ乾さん。…もう決まっちゃったんです」

「まさか…これも多数決か？」

「はい♪」

こいつらは何を考えているんだ…

ちなみに多数決は

クイズ大会に賛成か反対か。

賛成…津上翔一、城戸真司、ヒビキ、天道総司、野上良太郎

反対…乾巧、剣崎一真、紅渡

らしい。

「勝負で事前に情報が無いのとあるのは大違いだからな」

「だからって何故クイズ大会！？」

「…面白そうだから、ってモモタロスが勝手に…」

「もう始めますよ。準備してください準備」

「ちなみに出題者は俺、剣崎一真だ」

「ルールは妨害なし、早押し。正解したら抜けられます♪」

「最下位には罰ゲームだ」

マジでやるのかこれ？

マジなのか！？

「第一問！」

「始まったーッ！」

「オーズのコンボを全て挙げよ」

「はいッ！」

城戸が高速で手を挙げた。
早ッ！

「いいぞ。城戸答える」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー！どうだ！」

「残念。不正解だ」

「何だとッ！」

剣崎一真が超嬉しそうな笑みを浮かべてる。
…お前ら仲が良いのか悪いのかわからん…
だがこの問題、俺がもらった！

「はいッ！」

「答える門矢」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー、ラブコンボ！」

フッ！完璧だな！

「不正解だ。というかラブコンボは要らん」
「何ッ！」

この俺が不正解だと！

バカなッ！

「はい！」

「よし津上」

「ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ、タジャドル、
プトティラ、ブラカワニ、タマシー、あとタトバ」
「正解！」

あ。

タトバ忘れてた。

「タトバがいたか」

「タトバだけわかんなかった…」

「右に同じー」

「てめえらタトバに謝れ！」↑でも忘れてた乾巧

タトバ…影薄いなあ…

「第二問、龍騎ライダーは全部で何人？」

「今度こそッ！」↑城戸

「分かった」↑天道

「……よし天道だ」

「何でッ！？」

「一度答えたからだ」

全くわからん…

ていうかこいつら早すぎる…

「13人」

「正解だ」

「フツ」

ヤバい罰ゲームだけはイヤだ！

「第三問！」

今度は取る！！

「クウガのフォームを全て挙げよ」

「はい……」

「よし野上」

だから早えええ！！
俺も分かったのに！

「えーと、マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメツト！」

「……お前よくそれで手を挙げたな。不正解だ」

「およ……」

これは……いけるか！？

「はいッ！」

「門矢、今度こそ正解しろよ」

「ああ！マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメツト、グローイング、ライジングマイティ、ライジングドラゴン、ライジングペガサス、ライジングタイタン、ライジングアルティメツト！」

ふう、やっと終われるぜ。

だが、

「…不正解だ」

「嘘だッ!!!」

「そんなネタ使ってもダメだ。かなり惜しいぞ」

くそおおおおお!!!

「はい!」

「はいヒビキ」

「マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン、アルティメット、グロージング、ライジングマイティ、ライジングドラゴン、ライジングペガサス、ライジングタイタン、ライジングアルティメット、アメイジングマイティ」

「正解だ」

「よしきた!」

「バカなあああ!!!」

「アメイジングがあったかあ」

アメイジングマイティ!?何だそれ!?

「あと5人だな」

「死へのカウントダウンだね」

「津上!不吉なことを言うな!」

罰ゲームの内容が気になって仕方ない…

「では第四問…ブレイドのジャックフォームの変身時の音声は?」

「たとえば『K a m e n R i d e D E C A D E!』みたいなね

」

「超そつくり!!」

ジャック…?

キングならわかるが…

「はい!」

「よし城戸」

「アブソーブクイーン、エボリューションキング」

「…正解だ」

「っしやあ!!」

剣崎…本気で悔しそうだな。

城戸になんの恨みがあるんだ…

「第五問」

「罰ゲームが楽しみだなあ」

「後でボコすぞ城戸」

「Σ何でッ!?!」

漫才やってないで問題出せよ…

「キバの最強フォームは?」

「はい…」

「野上、もうボケるなよ」

「ぼ、ボケてないですよ!えーと、インペラーフォーム!」

「…もうボケるなと言ったよなあ」

「今のは僕も許せません…!」

剣崎と紅が変身してもいないのにキングラウザーと斬バットソードの切っ先を野上に向けている…

野上が罰ゲーム前に死ぬ！

罰ゲームがそんなに酷いものかは知らんが。

「次の問題に行けッ！！」

「…冗談ですよ巧。本気でやるわけ無いじゃないですか」

紅の目が笑ってない…

もう嫌この面子。

「というかお前ら、まだこの問題は続いてるぞ？」

「「「あ」」」

「はいッ！！」

「てめっ、紅！」

「早押しですから！エンペラーフォーム！」

「正解だ」

ヤバイヤバイヤバイ！！

あと3人だ！

「第六問にいくぞ」

「そろそろ正解しないとヤバいんじゃないか？」

「カブトのライダーキックに使われるエネルギーは？」

「キタアーツ！！！」

「うわっ！？」

乾がいきなり叫んで手を挙げた。

大声出すなよ！！

「乾、答えろ」

「タキオン粒子！」

「よくやった。正解」
「よしッ！」

うわあああああ！！！！
もうあと2人だあああ！！！！

「第七問、アギトの最終フォームは」

よしキタアアア！！！！

「シャイニングフォーム！」

「ですが、」

「なんだとおおおおお！！！！？」

ズルいだろそれ！？

「よく見る。『』を挙げよ」のような形でもないのに文末にクエス
チオンマークがない」

「くそおお！！！」

「じゃあ続きだ。アギトの最終フォームはバーニングフォームから
フォームチェンジする場合、何をする？」

簡単じゃねえか！！

「あ、それなら……」

「野上、正解しろよ」

「日光浴……だっ たっ け？」

「正解！」

「やった！」

結局俺が最下位だ！
…嫌な予感がするぞ。

「では罰ゲームを発表する。…ロイヤルストレートフラッシュだ」

「絶対この前当てられなかった腹いせだろそれ!？」

「さあな?行くぞ…!」

『Turn Up』

『Royal straight flash』

直接キングフォームになったぞ!?

こっちは生身!死ぬ!マジで死ぬ!!

「死ねえええ!!」

「やめろおおおおお!!!!!!」

時計を見ると6時半…
そろそろ朝飯だな。

「いや、何でもない」

その時キッチンからの方から、

「土くーん！エイジさーん！ご飯ですよーッ！」

となつみかんの声がした。
じゃあ行くか。

「エイジ！朝飯だぞ！」

「ああ…ごちそうになって悪いな…」

そうして俺の長い悪夢は終わった……

第七章（後書き）

ハロハロー！

剣崎シンジです！

今回は初のオールギヤグ！

テンションの維持が難しいです…

天道が好きなのにほとんど話してない！

ボクが書いたのに何故だ…orz

次回は事件の真相に迫ります！

探偵らしく！

第八章（前書き）

士「オレ達がチームだ!!!」

シンジ「ボクの真似をするな！」

ユウスケ「今日のゲストは辰巳シンジさんです！」

シンジ「今日はホントは取材だったのに…」

夏海「本当にすいません！」

シンジ「すぐ終わらせてよ？」

ユウスケ「じゃあもうあらずじいきます！」

士ユウ夏「「前回の3つの出来事!!!」」

士「1つ！俺の夢に剣崎一真御一行が乱入！」

ユウスケ「2つ！なぜかクイズ大会が勃発！ホントになんて？」

シンジ「3つ！結局罰ゲームは士でした！よし取材取材!!!」

夏海「…せめてもうちょっと真面目にやって欲しかったです…」

第八章

エリと水棲系と初コンボ

「いやー栄次郎さん料理上手ですねー」

俺たちは写真館で朝食を食べていた…のだが…

「そんなことはないよ、君も十分うまいじゃないか」

「いやいや、栄次郎さんには及びませんよー！なんかこう、思いが伝わってきます！」

…エイジとじいさんが意気投合してるし！

ちなみにじいさんとはなつみかんの祖父、光栄次郎のことだ。

毎日俺たちの食べる料理を作ってくれている。

そのじいさんがエイジに料理を教えているのだ。

エイジも昔料理人をやっていたらしく、料理が上手いのだが、そのエイジが教えてもらうほどじいさんはスゴいらしい。

「…じいさんもう写真館辞めて料理人になれよ」

「私は反対です！この写真館を続けな…」

「でもレストランとか始めたらすぐに土の踏み倒した分を取り返せると思うけどなあ…」

「後でおじいちゃんに頼んでみます」

変わり身早ッ！！

だが頼んでも無駄だろうな…

楽しいから作ってるだけだし。
その時エイジが、

「あ、おい土ー！土ってばー！」

「聞こえてる！で、何だ？」

「そいえば会ってもらいたい人がいるんだ」

「会ってもらいたい？」

何でこのタイミングなんだ。

しかもずいぶん急だな…

「誰だ？」

「うん。斑鳩ファウンデーション会長秘書の…」

うん？

なんか聞いたことのある肩書きだな…

「外街エリっていう人」

外街エリ……

そうだ！

思い出したぞ…

「あの辛党か…」

「ああ！あの人ですか！」

「あの激辛麻婆豆腐はもう色からアウトだった…」

「あ、知ってたんだ！じゃあ話が早いや」

「…また斑鳩ファウンデーションに行くのか」

はつきり言って、もうあそこには行きたくない。

いい思い出が1つもないからな。

「うつん違っよ」

「え？じゃあどこに行くんですか？」

「えーと確か…エリのバイト先の…レストランNEKOJITAだ
！」

（レストランNEKOJITA）

「こんにちは皆さん」

俺たちはエイジに連れられて裏路地にあるレストランに来ていた。
そこで外街に会っていたのだが…

「またお前はゲテモノ料理食ってるのか…」

「ゲテモノではありません。TKG（唐辛子かけご飯）です」

「…すまん訂正だ。料理ですらない」

しかも粉末をかけているのではなく、そのまま（あの細長いの）を
のせて食べているのだ。

…拷問か？

「えーと…話していい？」

エイジが確認するが、誰も返事をしない。

俺と外街の間に流れている変な空気に押されているみたいだな。
俺は気にしていないが。

「……沈黙は肯定と受け止めます。この外街エリは、なんと水棲系のグリード、メズールなんです♪」

は？

「ええええええええええ！！！！？」

「?！」

「…店内では静かにしてください」

「え、だつて…ええ！？」

かなり驚いた……

まさか外街がグリッドだとは……

「だが何故お前はグリードなのにエイジ……オーズの味方をするんだ？」

「アंकと同じ理由です……利害が一致してるから」

「その利害って何なんですか？」

「当然コアメダルです」

「何故コアメダルが欲しいのに斑鳩のところにいるんだ？」

「理由は色々ありますが、一番は斑鳩ファウンデーションに保管されているコアメダルの奪還です」

斑鳩ファウンデーション！？

つていふは、

「お前はスパイみたいなモノなのか？」

「まあそうですね。エイジ達に斑鳩から得た情報を渡してますし」

「……カッ
コいいなあ……」

「おいユウスケ。何で羨ましそうに外街を見ているんだ」

ガキかこいつ…
ていうか、

「そもそもコアメダル狙いでエイジにつく理由が分からん。それなら斑鳩についた方が楽じゃないか？」

「うーん…確かに」

エイジも俺の意見に同調する。

「う…それは…」

何だ？顔を赤くして口ごもったぞ？
まさか…

「お前エイジが好…」

「笑いのツボ…！」

グギッ！！なんて効果音をあげてなつみかんの指が俺の首に突き刺さった。
途端に、

「くっ…はっはっはっはッ…！！」

笑いが止まらなくなった…
なつみかん…この野郎…！

「何しやがる…ははっ…！なつみかん！」

くそッ！まだ余波が…！

「人の恋路を邪魔するからです」
「そうだぞこの空気の破壊者！」

何だこの言われよう…

しかも当のエイジは頭の上にハテナ浮かべてるし…

「ゴホン！それでは外に出ましょう。うるさすぎて迷惑になってます。それに…」

外街は急に真剣な顔になり、

「グリードが近くまで来てます」

くとある裏路地く

レストランNEKOJITAの前では、3人の人…いや3体の異形が話していた。

「ここからメズールの気配がするう！」

「ここか…」

「ここにメズールが…状況によつては…」

あれがグリードか…

え？俺たちがどこにいたかつて？

それは、

「まさかボク達が外街さんをおとりにして敵の隙をうかがっているなんて、あいつら思わないだろうなあ」

…全部エイジが説明してくれた。
ちなみに場所はレストランの近くにある樽の中。
ちようど小さな穴が空いていて、外が見えるのだ。
そろそろ予定通りなら…

その時レストランの近くにバイクが止まった。

お！来たな！

バイクから降りてヘルメットを取ったのは、アंकだった。

「おい、お前ら！ここで何している！」

「あ、アंकだあ…」

「貴様！何をしに来た！」

「ていうかガメル興味無さげだね…」

先ほど連絡を取って作戦に協力してもらった。

作戦とはこうだ。

まずは店内にわざと外街を置いてきて、普段隠しているグリードの
気配を少し出させる。

すると、グリード達が来るので、そのタイミングでアंकに飛び出
してもらう。

これがここまでの予定。

そして、

「カザリにウヴァにガメルか…ここで一網打尽にしてやる！変身！
！」

『カポーン』

「変身した！？」

「何だこいつは？」

アंकがヤツらの気を引き付けてる間に、

「今だ！」

「ああ、しくじるなよ！」

「当たり前だろ」

「「変身！」」「」

『Kamen Ride DECADE!』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

一気に畳み掛ける！！

まず俺は一番速そうなカザリに狙いをつけ、

『Final Attack Ride D-D-D-DECADE
E!』

「はあああ！！」

「デイクイド！？うわあああ！！」

カード状のホログラムを突き抜けながら、ライドブッカー・ソード
モードで斬りつける！

カザリは直撃し、メダルをばらまきながら吹っ飛んだ。

「カザリ！！」

「お前の相手はオレだ！」

「ぐっ！」

緑色の昆虫のような姿をしたグリード、ウヴァはカザリの助けに回
ろつとしたが、そこはユウスケが上手くやってくれた。

さて、エイジの方は…

「行くぞエイジ！」

『ドリルアーム』

「ああ！」

『サイ！ウナギ！バッタ！』

「メスールう…お前らジャマだあ！」

灰色の巨大なグリード、ガメルと戦闘していた。
かなり苦戦はしているみたいだな。
加勢するか。

そう思いエイジ達の方に近づこうとした時、

「…デイクイドオオオ！！！」

『Kick』

「何ッ！？ぐわっ！」

不意打ちを食らって地面を転がってしまった。

くそ、まだ倒せてなかったか…！

すると、足下にセルメダルとは違う黄色いメダルがあることに気付いた。

「これは…」

チーターのコアメダルだった。

俺はライオンも持っている。

エイジはトラを。

この3つがあれば…

俺はライオンとチーターのコアメダルを、

「エイジ！受けとれッ！」

「は？うわっ！？」

エイジに向かって投げつけた！

ナイスキャッチ！

「これは…」

「使え！コンボができるだろ！」

「…アंक、ちよつと離れてろ」

エイジはドライバーからメダルを全て外し、黄色いメダル3枚を代わりに入れた。

さあ…！エイジの初コンボだ…！

「…いくぞ！」

『ライオン！トラ！チーター！ラタラター♪ラトラーター♪』

…エイジは黄色い装甲、青い瞳を持つ獣の王、ラトラーターコンボに変身した。

そして、

「…うおおおおお！！！！」

急に叫んだかと思うと次の瞬間、

「うつ！」

ガメルの巨体が吹っ飛んでいた。
速い！

クロックアップ程では無いが、目でギリギリ追えるような速度だったぞ！

そしてエイジは高速でガメルとの距離を詰め、

『スキヤニングチャージ！』

「せいやあああああ……!!」
「うわあああ！」

目の前に発生させた黄色の円を通り抜けトラクローでX字にガメルを切り裂いた！

ガメルはメダルを吹き出して膝をつく。
だが、まだやられてはいない。

「グリードはどいつもこいつもしぶといな……」
「くっ……しょうがない！使うぞカザリ！」

そう言っただけでカザリが取り出したのは、またカードだった。
だがカザリの使うラウズカードとは違う。

「今度はアドベントカードか……！」
「カザリの報告通りだな。これも知っていたか」

そう、ウヴァが持っているのは龍騎の世界のライダーが使うカード、アドベントカードだった。
そしてそれを腕につけた箱の様なものに差し込むと、

「今回は逃げさせてもらっ
『N a s t y v e n t』

耳を塞ぎたくなるような不快音が辺りに響き渡った！
耳が……！

「ぐううう……！」
「なにこの音……」
「頭いたい……」

「俺達は帰るぞ」

「ガメルも連れてかなくちゃ」

「そうだな」

ま…待て…！

だがあまりの音に俺たちは何もできなかった…

第八章（後書き）

シュッ！↑ヒビキさんのヤツです

剣崎シンジでーす♪

八章です！

八章にしてやっとエイジがコンボを…！

今までよく亜種コンボで頑張った…！

ありがとう亜種！

そしてこれからもよろしくね亜種！

今回はグリードの根城にこっちから突撃！？

…するかもです。

第九章（前書き）

士「…なあ」

ユウスケ「どうした士？」

士「まだ俺が使ってないカメンライドってなんだ？」

ユウスケ「えーと…クウガ、アギト、龍騎、ブレイド、かな？」

士「なんかな…今回も出てこないヤツさ…もう出なそうなんだよな…」

ユウスケ「おいてめえ、クウガに泣いて謝れ」

夏海「…もはや前書きですらハブられる私って…orz」

士「今回のゲストはこいつだ」

ワタル「こんにちはー」

ユウスケ「ワタルくん！」

ワタル「ユウスケさん！また会えましたー！」

夏海「私たちに残された最後の希望、ワタルくんですー！」

ワタル「Σ最後の希望って何ですか！？」

士「もうお前しかまともなヤツが残ってないんだよ…」

エイジ「ちなみに残りの面子はソウジさんとモモタロスさんらしい

よ！ボク知らないけど！」

士「お前は出てくるな」

エイジ「いつもそうだけどひでえ！」

ユウスケ「…そろそろあらずじにいこうか、ワタルくん」

ワタル「はい…」

士ユウ夏「…前回の3つの出来事！！！！」

士「1つ！エイジとじいさんが意気投合！エイジが料理うまいなんて…」

ユウスケ「2つ！外街さんがグリードだった！ビックリしたよホン

ト

ワタル「3つ！グリードとの戦闘！…ガメルってグリード馬鹿っぽ
そうでしたね」

第九章

プリンと想いと全面戦争

「まだ頭いたいー……」

「ラトラーターは五感も強化されるからな……」

「おいしーです！」

「エイジは食べないの？」

「……頭いたい」

グリード達との一戦から30分経った頃。

俺達はデザート専門店『モモプリン』でプリンを食べていた。

……約一名を除き。

そんなに痛いなら病院行け！

「……本当に大丈夫ですか？」

エイジの横では外街が心配そうにしている。

そうそう外街といええ。

多少疑問があつたんだ。

「……なあアンク」

「なんだ？」

「グリードでも恋つてするんだな」

そう言うと、アンクは複雑そうな顔をした。
どうしたんだ？

「その事なんだがな…よくわからん」

「分からない？」

「推測ならできるが……多分あれはメズールの『願い』に大きく起因している」

「願い？」

「…あいつは人間の『愛情』に憧れていた。だからガメルには優しくなかったな」

それが何なんだ？

じゃあもう愛情を手に入れていたんじゃないか？

「だが所詮はグリード。ガメルに対する愛情はままごとなんだよ」

「でも今はエイジに本気で惚れているように見えるが」

「…それがわからない。そんなことはあるはずがないんだ」

「…グリードだからか？」

「そうだ。絶対に満たされない。…それがグリードだ」

そうか…

グリードも色々あるんだな…

そう思っていると、

「なあみんな」

お、やっとエイジが回復したぞ。

でもなんか凄い笑顔なんだが…

「どうしたんだ？」

「もうこっちからグリード潰さない？」

こいつ怖い！

ニコニコ笑顔でこの台詞は怖い！
ただ、その意見はいいと思うが…

「ヤツらがどこにいるか分かるのか？」

「それは俺が知っている」

そう言ってアंकが手を挙げる。

そうか…それなら、

「俺は賛成だ」

「俺も」

俺とアंकが同意した。

そして、

「私事です」

「じゃあオレも賛成！」

外街とユウスケも手を挙げた。

あとは…

「お前はどうかんだ、なつみかん？」

「…私たちから攻めたらダメだと思います」

やっぱりか…

伊達に長く共に旅をしていない。

そう言うと思ったぜ。

「だがな、なつみかん。あいつらは今も人を襲っているかもしれないんだぞ？」

「…それでもです!」

おいおい…

これは説得しきれないぞ…

すると外街が、

「なら、懲らしめるだけにしましょうか」

な!?!なに言っただこいつ!?

まあこれならなつまかんも賛同するが…

すると案の定、

「それならいいです」

と納得してしまった。

俺は小声で、

「…いいのか?あんなこと言って」

「はい。どうせ嘘ですし」

「まあ…間違った判断とは言わないが…嫌われるぞ?」

「別に構いません。…馴れてます」

そうか…

そこまでの覚悟があつて言っただけならなにも言わん。

だから俺はアंकに、

「それでグリードの根城はどこだ?」

「…街の外れの廃墟だ。バイクで5分くらいだな」

廃墟か…

それなら思い切り暴れられるな。

「それじゃもう行こうか」

「待てエイジ」

アंकがエイジを呼び止める。

そして右手をエイジに向け、何かを飛ばした。

「これは…」

「クジャクだ。いざとなったら使え」

「一枚で問題ない。セルメダルちゃんと取ってこいよ！」

「…ああ！」

「それなら私からも」

外街は立ち上がり、エイジにメダルを2枚手渡した。

「シャチとタコ…」

「これでコンボができるでしょう？まあアंकよりもマシですし、
持っていてください」

「…ありがとう」

よし、準備はできたな。

じゃあ…

「行くか」

「ああ」

「おう！」

くとある廃墟

ここは街外れの廃墟…

今は異形のモノたちが住み処にしているのだが…

「おいカザリ…」

「なにウヴァ？」

「ガメルのメダルが減っている」

「なに？ガメル本当？」

「うー…ゾウが一枚ない…」

「くそ…オーズだな…！」

そう言つて化け物たちは怒りに震える…

その時、

「グリードさんいますかぁー♪」

「ッ！？」

化け物たちは一斉に入り口の方を見る。
そこにいたのは…

「オーズ…！！」

仮面ライダーオーズだった。

俺たちの派手な登場にグリードたちは困惑しているようだった。

それはそうだろう。

今まで攻めてこなかったヤツが急に來たら誰だって驚く。
何はともあれ…

「さあ…ヤツらを倒すぞ!!」

「「「変身!!」」」

『Kamen Ride DECADE!』

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ♪タトバタ・ト・バ♪』

俺たちはグリードに突っ込んでいく!
だが、グリードもすぐに対応してきた。

「くそッ!?ウヴァ!」

「分かっている!」

『Advent』

その音声と共に出てきたのは…

巨大な蜘蛛だった!

だがな、虫は火に弱いのがお約束なんだよ!

「あいつは俺がやる!」

『Kamen Ride AGITO!』

『Form Ride AGITO Flame!』

『Attack Ride Flame saber!』

俺は黄金の龍の戦士、仮面ライダーアギトに変身し、炎を使う赤の戦士、アギト・フレイムフォームに姿を変えた。

そして呼び出した炎の剣、フレイムセイバーで蜘蛛を斬りつける!!

「はぁッ!」

だが思ったよりも硬く、刃が通らない！
そして弾かれたところを脚で吹き飛ばされた！

「ぐあああつ！！」

「土ッ！」

心配したエイジが声をかけてくる。

だがエイジもユウスケも苦戦している。

エイジは1人でウヴァとカザリと、ユウスケはガメルと戦っている。
そこで俺は手に持ったフレイムセイバーを、

「ユウスケ！受けとれ！」

「うわっ！？」

ユウスケに向かって投げつけた！

ユウスケは驚きながらもそれをキャッチし、

「土サンキュッ！超変身！」

紫のクウガ、重厚な鎧を纏ったタイタンフォームにフォームチェンジした。

タイタンは速度が失われる代わりに防御、パワーが大幅にアップする。

これでユウスケは大丈夫だろうな。
多分。

じゃあ俺は…

「このでかい蜘蛛を焼き尽くすか！！」

『K a m e n R i d e R Y O K I ! 』

『Final Attack Ride R - R - R - R Y O K I
!』

俺の周りにとぐろを巻くように赤い龍、ドラグレッダーが飛ぶ。
俺はその中心を跳び、そして…

「はあああッ!」

ドラグレッダーの吐いた炎を纏いながらキックを決める！
そしてその蹴りは蜘蛛を貫通、爆散させた！
よしッ！

「エイジッ！加勢するぞ！」

「士ッ！頼む！」

俺はライドブッカーをソードモードにしてウヴァに斬りかかった！
だがウヴァはそれを上手くかわし、

『Sword vent』

「食らえ！」

「アブなッ！」

剣を呼び出し反撃してきた！
それを俺はギリギリでかわす。
かすったぞ今…！

「士！どいて！一気に決める！」

そう言ってエイジは青いメダルを2枚取りだし、ドライバーに装填した。

「…エリ！使っよ！」

『シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ♪シャシャシャウタ♪』

エイジはシャチを思わせる頭に鞭持った腕、タコの足のようなモノがついている足を持つ青のコンボ、オーズ・シャウタコンボにコンボチェンジした！

そして、

「はぁッ！」

「ぐおおおー！」

「うわぁッ！」

頭から高圧水流を発射し、ウヴァとカザリを吹き飛ばした！

「くそ…完全態なら…！」

「ウヴァ…僕のメダルを全てもらって」

「なにッ！？何を言っている！」

「そうすれば完全態まではいかなくても、対抗できるだけの力が入るはずだ」

なんだ…？

小声で相談し始めたぞ？

「おい！バカなことは…」

「じゃあウヴァ、あとは頼むよ」

なっ！？

カザリがメダルに変わった！？

俺たちが驚いていると、ウヴァはそのカザリだったコアメダルとセ

ルメダルを全て吸収した。

「…ウオオオオオオオオオオ！！！！！」

「ッ！？」

「なんだ…？さっきとプレッシャーがまるで違う…！」

そしてウヴァは立ち上がり、俺たちに言った。

「俺は貴様らを許さない…。カザリの為に、貴様らを殺す…！」

俺たちの前に、ウヴァ・完全態が降臨した……

第九章（後書き）

今回は、重大な欠陥が見つかったため、多少の書き直しがありました。

詳しくは、剣崎シンジの活動報告を御覧ください。

おつす！オラごk（ry

剣崎シンジです。

あいさつネタがアアア！！

（ちなみに作者はあまりドラゴン・ールを知りません。悪しからず）

投稿遅れて本当にすいませんでした。

かなり反省しています（主に書くスピード）

そしてカザリ退場！

怒るウヴァ！

もはや影のガメル（とユウスケ）！

…なにげにアंकも残り一枚だし…

次回はウヴァ・完全態の力に手も足もでない士たち！

だがウヴァに異変が…？

第十章（前書き）

士「カザリがウヴァに吸収された…」

ユウスケ「まあしょうがないよ」

夏海「むしろせいせいしました」

カザリ「いいすぎでしょ!？」

士「あれなんでここにカザリが…？」

ユウスケ「ほらあれだよ。ここは本編総無視だから」

夏海「…」↑超不機嫌そう

カザリ「…」↑それを見て泣きそう

士「…今回のゲストはこちら!」

ユウスケ「ツツコミを放棄するな!」

ソウジ「よっ」

士「ってソウジ!？お前クロックアップの世界に閉じ込められて…」

ソウジ「いやほら、原作無視だからここ」

夏海「そういうことを言わないでください!」

ソウジ「それで…あの隅で体育座りしてるのはなんだ？」

士「無視で頼む」

ソウジ「…そうか」↑大体悟った

夏海「ソウジさん賢い!」

ユウスケ「じゃああらすじいくかー!」↑しばらくセリフなしで拗ねた

士ユウ夏「…」前回の3つの出来事!?!「」「」

士「1つ！モモプリンで作戦会議（？）！…モモプリン？」

ユウスケ「2つ！グリードの本拠地へ攻め込む！」

ソウジ「3つ！カザリがウヴァに吸収された！…カザリいいところなしだな」

第十章

遺志と暴走とあいつの正体

「俺は貴様らを殺す…カザリの為に！」

カザリがメダルになってウヴァに取り込ませた…？
ウヴァを回復…いや強化するために犠牲になったのか。

「エイジ…気をつける」

「ああ…あいつはヤバイ。そんな気がする」

このプレッシャー…

剣崎一真に負けてない…！

こうなったら…

「…先手必勝だ！」

『K a m e n R i d e B l a d e !』

俺はブレイドに変身して、ウヴァに袈裟斬りをかます！
だが、

「ふん」

「なっ！」

片腕で止められた！？
しかも無傷だ…！

そしてウヴァの角に電気が蓄積されていく…

「ぐあッ！」

「うわあああ！！！」

そしてウヴァを中心に雷が弾ける！

なんて威力だ…！

一発でブレイドへの変身が解けてディケイドに戻ってしまった。

エイジちも雷は直撃していた。

それによりシャチのメダルが排出されてしまい、ウヴァに取られてしまう。

「…メズールのメダルか。これも使わせてもらおう」

そう言って、ウヴァはそのメダルも取り込んだ。

「……」

だがエイジは呆然としたままだ。

外街のメダルを取られたショックがそんなにひどいのか？

そんなことより早く動かないとまずい…！

「エイジ！早く別のコンボにしろ！」

「…エリ、ごめん」

『タカ！カマキリ！チーター！』

おい！

ここでそんなコンボにしたら…！

「それは俺とカザリのメダル！返せ！！」

火に油を注ぐなよ！

「エイジ！とりあえずユウスケのどこに行くぞ！」

「先にガメルをやるのか？」

「…今のウヴァは2人じゃ無理だ！」

そして俺たちは後ろへ走った。

そして、

「ユウスケツ！マイティキックだ！！！」

「なんで！？いやいいけどさ！！！」

『Kamen Ride KUGA！』

『Final Attack Ride K-K-K-KUGA

！』

「はぁあッ！！！」

「うおおおッ！！！」

俺たちが放ったマイティキック…命名、ダブルマイティキックはガメルに直撃、そしてその巨体を5mほど吹っ飛ばしてメダルをばらまかせた。

「ガメルッ！」

「ウヴァぁ…おれ、もうだめ…」

そう言つてガメルはメダルに変わっていった。

その中に、割れてるメダルがある。

…あれが核だったのかもな。

「ガメルッ！！貴様らガメルまでも…！」

ウヴァはさらにそのメダルも吸収していった。
だがその間に俺は見つけた。
地面に落ちた白いメダルを。
あれは…！

「エイジ！メダルが落ちてる！拾え！」
「あ、ホントだ！」

そしてエイジが手に取ったのはゴリラと…サイだった。
…これはまさか…！

「サイがダブった」

「なにやってんのエイジー！」

「ボクのせいじゃないし」

運無さすぎるだろ

「…まあいい。とりあえずウヴァを倒すぞ」

だが、はつきり言ってる3人でも勝てるか分からない。

相手はそんな化け物なんだ…

だが、そこで意外なヤツが乱入してきた。

「ひやははははッ！！やってるねえ！」

偽オーズ・ガタキリバコンボが窓を突き破ってウヴァの隣に着地した。

いきなりのものでウヴァも動けない。

そして、

「これをあげるよお！」

ウヴァに向けて何かを投げた。
それは…

「コアメダルだと!？」

赤、青、白のコアメダルが6枚だった。
それはウヴァの体内に吸収され、途端に様子がおかしくなる。

「ぐ…おおおあああ!!!」

そして現れたのは、

「これが…暴走態かあ…!」
「でか…」

巨大なクワガタ…のような生物だった。

頭はクワガタの頭にサイの角が伸び、腕はゴリラの腕にカマキリの鎌があり、炎を灯している。

足(?)はバッタの脚の先からタコの足が無数に生え、その全てに鋭い鉤爪がついている。

そして大きさはその辺の一軒家と同じくらいの大きさの廃墟よりも全然でかい。

「なんだあれは…」

「あれはグリードの暴走だよ。コアメダルを取り込みすぎて、力の制御が効かなくなつたのさあ!」

そう言って狂ったように笑う偽オーズ。

…こいつ…！

だがその時、俺はあることに気づいた。

「あいつ…街へ向かってないか？」

俺の言葉に全員が驚愕した。

…偽オーズ以外は。

「当たり前だよー！斑鳩の持つてるメダルを狙ってるんだからねえ
！」

「…お前ホントに一回死ぬか？」

…本当にクズだなこいつ。

でも今は先にあのウヴァをどうにかしなくちゃな。

「エイジ。その怒りはあのデカブツに取っておけ」

「…結局あいつどうするの？」

「……倒す」

そう言っただけは、あのカードを取り出した。

城戸からもらったカードを。

そのカードは今ではブランクではなく、色が着いていた。

これを使うとどうなるのかは何故か分かる。

…だから少し楽しみだ。

『Attack Ride Family!』

その音声と共に呼び出されたのは……
今までの旅でできた仲間達だった！

「ワタル、シンジ、カズマ、タクミ、ショウイチ、ソウジ、アスム
…！」

「お久しぶりです！」

「よっ士♪」

「ようチーズ！」

「チーズ！？…こんにちは士さん」

「久しぶりだな」

「いやあの…俺は？電王は無視？」

「久しぶり？…そうでもないか」

「こんにちは！…師匠はどこですか？」

今は仮面に隠れて見えないが、みんなの顔は容易に思い出せる…
だが今は感傷に浸っている場合じゃない。

「お前ら！あのデカブツが見えるよな？」

「まあ…そりゃな」

「嫌でも見えますよ」

「あいつを倒す。できるか？」

「…できないとでも？」

「楽勝です」

心強いな…

よしじゃあ早速、

『	Final	From	Ride	K	-	K	-	K	-	K	U	G	A	！』		
『	Final	From	Ride	A	-	A	-	A	-	A	G	I	T	O	！』	
『	Final	From	Ride	R	-	R	-	R	-	R	Y	O	K	I	！』	
『	Final	From	Ride	H	-	H	-	H	-	H	I	B	I	K	I	！』
『	Final	From	Ride	K	-	K	-	K	-	K	A	B	U	T	O	！』

「ちょっとくすぐつたいぞ！」

「うわっ！」

「なっ!？」

「ちよっ!？」

「え!？」

「なに？」

クウガをでかい鉄のクワガタ、クウガゴウラムに。

アギトはバイクのタイヤを横倒しにしたような乗り物、アギトトルネイダーに。

龍騎は赤き龍、リュウキドラグレッダーに。

響鬼は大型の、鳥を模したヒビキオンゲキコに。

カブトは大きな赤いカブトムシのような機械、ゼクターカブトに。それぞれ変形した。

そして、

「みんな乗れ!シンジは俺とエイジが乗る!」

『お前あとで覚えてろ』

「くえッ!」

『Attack Ride Blast!』

『バsshャー、マグナム!』

「はあッ!」

『Thunder』

『Full charge』

「俺の必殺技! パート2!」

そのまま全員が空からウヴァに攻撃をする!だが、

『ぐおおおッ!!--!!--!』

『つて効いてないよなあれ…』

「あーもう！チーズ！なんかあるのか！？」

「チーズじゃない！…あるに決まってる」

『Final Attack Ride F・F・F・Family
y!』

すると全てのライダーが元の形態に戻り、一斉に飛び上がった。
俺もエイジもな！
そして、

『はああッ！！！』

『うごおあああ！！！！』

ウヴァに全員のキックが命中し、爆散した。
そして役目を終えた俺の仲間たちは、

「師匠によろしく言うておいてください！」

「じゃあまたな」

「へっ！もう呼ぶんじゃねえぞ！」

「…じゃあな」

「また会いましょう」

「写真うまく撮れるといいな！」

「じゃあなチーズ！」

「今度はウチの世界に来てくださいね！」

各々別れの言葉を言うて消えていった。

…また会えるだろ。

そんな気がする。

あとやることは1つだけだ。

「じゃあ…残ったのはお前だけだな」

「この偽物野郎が…」

「あいつだけは許せない…！」

そして俺たちは、廃墟だった場所にいる偽オーズを睨み付けた…

第十章（後書き）

あい！！

剣崎シンジです。

投稿遅れてすいません！

色々ありまして…

とりあえず次回で終わりの予定です。

最終決戦で終わればですが。

今度こそ明後日には投稿を…！

次回は偽オーズとの最終決戦！

だけど相手はあのコンボを使ってくる…！！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186x/>

仮面ライダーディケイド～仮面ライダーオーズの世界～

2011年11月1日19時09分発行